

わたしの主、わたしの神よ

ヨハネによる福音書 20 : 24 - 29



司祭 ヨハネ 井田 泉

2023年4月16日

復活節第2主日

聖光教会にて

「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマス」

このトマスは、一般にどういうイメージが持たれているでしょうか。「復活の主を疑ったトマス」「疑い深いトマス」——こういうイメージが固定しているとしたら、わたしは今日、トマスの名誉回復をしたいと思います。

トマスには以前、こんなことがありました。イエスが愛しておられたラザロが重い病で死に瀕しているということが伝えられました。しばらくしてイエスは「もう一度、ユダヤに行こう」と言われました。ラザロを訪ねると言われたのです。弟子たちは反対しました。なぜなら、そこはとても危険だからです。

「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか」ヨハネ 11:8

しかしイエスはこう言われました。

「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」11:11

これを聞いたとき、トマスは感動しました。このイエスという方は、自分の命を危険にさらしてでもラザロを救おうとされるのだ。トマスは仲間の弟子たちにこう言いました。

「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」11:16

イエスと一緒に死んでよい。この方と一緒に死のう。彼はそう本気で思ったのです。このことだけで、トマスがどんなにイ

エスを愛しイエスを信頼していたかがわかります。

さて今日の福音書です。

「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。」ヨハネ 20:24

日曜日の夕方、復活されたイエスが弟子たちのところに来られたとき、トマスはそこにいなかったのです。

「そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』」20:25

ほかの弟子たちが見たというのは幻覚だろう。一時の興奮など冷めてしまう。トマスは冷静です。理性的です。けれども彼の心の片隅には、大きな悲しみがあつたかもしれません。イエスがほんとうに復活して仲間のところに来られたなら、なぜ自分はその場にいなかったのか。なぜイエスは自分には出会ってくださらなかったのか。彼の心は苦しんでいました。

しかしこの後が大切です。このトマスを目指して、イエスは来られるのです。

「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあつたのに、イエスが来て

真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』」 20:26-27

イエスは来て、真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」と言われました。それは皆に言われたのですが、とりわけトマスに言われた、トマスに平和を呼びかけられたのです。平和がなかったのは、平和を必要としていたのは、トマスです。

「あなたがたに、あなたに平和があるように」

このイエスの言葉が彼の心に浸透してきます。慰めと平和が彼の魂を潤します。これが、トマスが聞いた復活のイエスの第1の言葉です。

復活のイエスがトマスに言われた第2の言葉。

「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。」

トマスが先にほかの弟子たちに言ったこと、彼が求めたとおりのことをするように、とイエスは言われます。トマスはイエスの手を見ます。その手の傷跡を見ます。わき腹の傷跡を見ます。トマスは手を伸ばしてイエスの手に触れたに違いない。あるいはもっと、今風に言えばイエスをハグしたに違いない。い

やむしろイエスのほうが彼を抱き寄せてくださったのではないのでしょうか。もはやイエスの手やわき腹の傷跡に手を入れたりする必要はありません。ただ、イエスがこんなに自分を愛して、自分たちのために傷ついてくださったことが申し訳なく、またありがたくてたまらない。イエスが復活されて、生きて今、目の前におられる。疑いようもありません。

そして復活のイエスがトマスに言われた第3の言葉。

「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

これは信じない者を非難する言葉でしょうか。そうではありません。これは信じない者、信じたくても信じられない者を信じることへと招く招きの言葉、愛の言葉です。人を、信じない／信じられない孤独と苦しみから解放し、信じることの幸いへと引き寄せる言葉です。イエスはトマスと出会いトマスを引き寄せて、信じる者とされた。さっきまで信じなかったことを、軽く叱りながら、彼を愛をもって慰め、励まされます。

「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

トマスは今や信じて、喜びに満たされます。

これはわたしたちに対する言葉でもあります。あなたは信じてよいし、信じることができる。今、わたしがこのように事実生きてあなたの前にいるのだから！ わたしたちを信仰へと招く愛の言葉です。

トマスは答えてイエスに言います。

「わたしの主、わたしの神よ」 20:28

これはトマスの真心からのイエスに対する信仰告白です。イエスの呼びかけに対して、トマスは心から応答して叫んだのです。

「わたしの主、わたしの神よ」

イエスよ、あなたこそ、わたしを救ってくださるわたしの主、わたしの神。

ここでトマスは、わたしたちのために信仰のひとつの大切な扉を開いてくれました。何かというと、「わたしの神」という言葉です。

イエスは、まことの人であり、かつまことの神である——これがキリスト教の根本です。

イエスがただ人であるだけなら、特別な人であって限りなく完全で限りなく神に近い、しかしやはり神ではないなら、わたしたちの救いの根拠はあいまいです。

わたしたちは父なる神に対して祈るとともに、イエスに向かっても祈ります。それはイエスがまことの神であるから、わたしたちを愛しつつわたしたちに耳を傾けてくださる神であるからです。神でなければ、イエスに向かって祈りません。

トマスは神を求めていました。神の存在はもちろん信じていた。けれども「わたしの神」を知らなかった。しかし今、わたしを愛してわたしのためにいてくださる神をはっきりと知りました。「わたしの神」。

つい先ほど聖歌 184 番を歌いましたね。その 4 節。

「トマスの迷いも 晴れわたりにて
イエスを主とたたえ 神とあおぐ」

これです。「神とあおぐ」。

イエスはわたしの主、わたしの神。このトマスの発見、感動、認識によって、イエスを神と告白するわたしたちの信仰の扉が開かれました。

ニケヤ信経を唱えるとき、わたしたちはイエス・キリストについて何と告白しているのでしょうか。

「……独り子、主イエス・キリストを信じます。主は神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神……。」

イエス・キリストはまことの人であるから、わたしたちの痛みと病と死をご自分のものとして経験し、また引き受けてくださる。そしてイエス・キリストはまことの神であるから、わたしたちを完全に救うことができるのです。

一説によれば、トマスは後にインドまで行って伝道し、そこ

で殉教したとも伝えられます。トマスの伝統を引くとされるマル・トマ教会が、現在もシリアやインドに存在し、しかも聖公会とは深い交流関係にあります。

トマスは、疑い迷うわたしたちの先輩です。そして疑い迷うわたしたちに復活の主の救いがあることを示してくれた先輩です。復活のイエスはわたしたちを放置せず、近づいてご自分をわたしたちにはっきりと示してください。そのことをトマスはわたしたちに伝えています。

祈ります。

復活の主イエスさま、あなたが迷い疑うトマスを愛してご自身を示し、彼に感動と喜びを与えてくださったように、わたしたちにもご自身を示して喜びをください。わたしたちの不安と不信仰を癒やし、復活のいのちをもって祝福してください。アーメン